

令和5年度厚生労働省委託事業

介護福祉士国家試験の検証に 資するデータの分析業務 報告書

目次

はじめに	3
1 検証方針	5
(1)受験しやすい仕組みの考え方	5
(2)受験方法	7
(3)分割パターン	8
(4)合格基準	9
(5)運営面への配慮	11
2 検証内容	12
3 検証結果	13
(1)受験者の属性	13
(2)科目群別の難易度	15
(3)試験科目をパート分けした場合の時間割	20
(4)試験科目をパート分けした場合の得点状況	22
(5)パート分けした場合の合否シミュレーション	23

はじめに～業務の背景と目的～

- 我が国では少子高齢化が進展する中、介護を必要とする方の急速な増加が見込まれていることから、2040年(令和22年)度末までに新たに約69万人の介護人材の確保が必要とされている。また、認知症高齢者や高齢単身世帯の増加等に伴う複雑化・多様化した介護ニーズへの対応が求められており、高い専門性を有する介護人材の確保育成が喫緊の課題となっている。
- このため、介護福祉士国家試験については、その重要性がこれまで以上に増しているが、その受験者は減少傾向にある。
- そこで、介護に係る一定の知識や技能を習得していることを証明する唯一の国家資格である介護福祉士についてみると、その受験資格には4つのルート(養成施設ルート、実務試験ルート、福祉系高校ルート、経済連携協定(EPAルート))があるが、このうち最も受験者数が多いのは実務試験ルートで8割以上を占めている。しかしながら、就労と試験に向けた学習の両立が課題との声があり、受験者数は平成30年度の85,169名をピークに令和4年度では68,769名と遞減している。
働きながら資格の取得を目指す人が大半であり、そのような人達が受験しやすい国家試験の仕組みについて検討する必要がある。
- また、最近では外国人介護人材の受入れが増加している中、「技能実習」や「特定技能」で入国した方々が、日本で在留期間の制限なく就労することを希望する場合には、介護福祉士国家試験資格を取得する必要がある。
- 技能実習生や特定技能外国人は在留期間に制限があるため、引き続き日本での就労を望む場合は、実務経験ルートにより、つまり働きながら介護福祉士国家資格を取得し、在留資格「介護」に移行する必要がある。また、在留期間及び介護福祉士国家試験を受験するために3年の実務経験が必要であることを踏まえると、受験機会が少ないとても指摘されている。
外国人介護人材の確保・定着のため、介護人材の質を維持しながら、外国人材が受験しやすい仕組みについても検討する必要がある。
- そこで、本業務は、介護福祉士国家試験の過去の試験結果を分析し、介護福祉士国家試験の受験しやすい仕組みの導入について検討するための基礎資料を作成することを目的とする。
具体的には、これまでに実施した介護福祉士国家試験の試験結果等より、受験しやすい仕組みの導入を検討するためのデータを整備し、合格科目免除(分割)の導入方法についての検討を行った。

はじめに (参考)介護福祉士国家試験の概要(第36回)

■ 筆記試験の試験科目及び合格基準

ア 問題の総得点の60%程度を基準として、問題の難易度で補正した点数以上の得点の者。

イ アを満たした者のうち、以下の試験科目11科目群すべてにおいて得点があった者。

1. [1] 人間の尊厳と自立、介護の基本
2. [2] 人間関係とコミュニケーション、コミュニケーション技術
3. [3] 社会の理解
4. [4] 生活支援技術
5. [5] 介護過程
6. [6] こころとからだのしくみ
7. [7] 発達と老化の理解
8. [8] 認知症の理解
9. [9] 障害の理解
10. [10] 医療的ケア
11. [11] 総合問題

(※)配点は、1問1点の125点満点である。

■ 実技試験の試験科目及び合格基準

介護等に関する専門的技能

課題の総得点の60%程度を基準として、課題の難易度で補正した点数以上の得点の者を実技試験の合格者とする。

(出所)公益財団法人社会福祉振興・試験センターホームページ「試験概要」(<https://www.sssc.or.jp/kaigo/gaiyou.html>)

「合格基準」(https://www.sssc.or.jp/kaigo/kijun/kijun_02.html)

1 検証方針 (1)受験しやすい仕組みの考え方

本業務は、以下の方針に基づき、検証を行った。

なお、当初予定していた「回答方法の見直し(5肢1択から4肢1択への変更)」については、検討会において、「受験生にとって受験に向けた勉強がしやすくなるなど受験しやすい仕組みと言えない」と議論され、これ以上の検証は行わないこととした。

■ 受験のための学習への取り組み易さ、受験者の利便性の両側面から受験しやすい仕組みの導入を検討する

- 国家試験は、合格率が8割を超えており、受験者数は減少傾向にあり、働きながら受験する者が8割以上を占め、受験者は日々の介護の業務を行いながら受験のための学習時間を確保している状況にある。
- 在留資格「特定技能介護」は在留期間中に介護福祉士の資格を取得することで、在留資格「介護」に変更し、引き続き日本で介護の業務に従事することができるが、国家試験は5年間の在留期間のうち2回しか受験できず、受験機会が限られている。
- このため、受験しやすい仕組みの導入を検討する必要がある。受験しやすいということには、受験のための学習への取り組み易さ、受験者の利便性の両側面があり、これらに留意しつつ、検討を進めることが求められる。

■ ただし、受験しやすい仕組みの導入によって、介護福祉士の知識及び技能が低下するものであってはならない

- 認知症高齢者の増加、単身高齢者の増加等に伴う多様化する介護ニーズに対応するため、これまで以上に高い専門性が求められる中、国家試験は介護福祉士としての知識及び技能を担保することが求められており、受験しやすい仕組みの導入によって、介護福祉士の知識及び技能が低下することはあってはならない。

1 検証方針 (1)受験しやすい仕組みの考え方

■ 現在の制度を前提とした仕組みを検討する

- ・ 新たな資格等(一部のパートのみ合格者に与える別資格など)を作ることは考えていない。あくまで現在の制度を前提とした上で、「受験しやすい仕組み」を検討する。また、1科目でも0点の科目がある場合は不合格という条件は、現行のまます。

■ 科目の配置を大きく変更することは避ける

- ・ 第35回試験から、新カリキュラムに対応した試験科目の配置への変更があった。基礎的な科目を午前に実施するという変更に従つて、「こころとからだのしくみ」は午後から午前に移った。昨年度に変更したばかりなので、再びすぐに変更することはしない。

■ 一人ひとりの状況に応じた学習を後押しすることで、受験しやすい仕組みとなる

- ・ 国家試験が介護福祉士としての必要な知識及び技能を担保するものであることを踏まえると、学習しなくても合格する仕組みは適当ではない。パート合格については、これを導入すれば、例えば、初年度に不合格パートがあった者について、次年度は不合格パートの学習に注力できるようになるなど、一人ひとりの状況に応じた学習を後押しすることが可能となり、より受験しやすい仕組みとなることが考えられる。

■ 1科目ごとではなく、いくつかの科目をまとめたパートで判断することが適当

- ・ 既に部分合格を導入している他の国家試験を参考すると、保育士試験では1科目ごとの一部合格が可能になっているが、それはそれぞれの科目が同じくらいの出題数であるから可能となっている。介護福祉士試験では科目ごとに出題数のばらつきがあるため、1科目単位よりは科目をまとめたパートによって部分合格を判断する。

1 検証方針 (2)受験方法

■ 初回受験時は全科目受験、再受験時は受験申込時に選択する形とする

- 養成課程を考慮すると、科目群や領域単位で区分けした上、まずは全科目を受験して、合格基準を満たさなかったパートを再度受験することが望ましい。
- 検討会での委員意見は下記の通り。
 - 初回受験が一番学習量・知識量があるので、合格率が高くなる。初回から分割して受験できるようになると学習意欲の低下が懸念される。初回は全科目受験するという制度の方が、質の観点からよいのではないかと思われる。
 - 養成校では2年間全科目一体で学んでいる。単位をすべて取得すれば国家試験を受けられるという建付けになっている。それを踏まえると、1科目ずつ受験するというのは現実的ではない。
 - 保育士試験は科目ごとに合格基準を決めているので、1科目ごとに受験できるという制度は合理的だが、介護福祉士試験はそうではないので、初回は全部受けるというのが自然ではないか。

■ 試験は1日で実施する

- 実務経験ルートの受験者は介護の業務に従事しながら勤務シフトを調整して受験に臨むこと、また運営面の負担も考慮し、試験期間は、現行どおり1日間で全科目の試験を実施することが望ましい。

■ 複数科目をまとめたパートによる合否判定とする

- 全科目の総得点による合否判定という現行の仕組みは、受験者の総合力を問うものである。科目ごとの得意不得意(得点のばらつき)を補い、総得点で合格基準を満たすこともありうることから、再受験時においても、パート合格したパートを改めて受験するか否かは受験者の希望制とし、受験申込時に受験者に選択させることが望ましい。

1 検証方針 (3)分割パターン

■ 科目のグループ(パート)は3分割

- 各科目の出題数、合格基準及び学習における科目のつながりを踏まえながらパート設定を行うことが望ましい。
- 受験のための学習への取り組み易さを確保しつつ、受験者の利便性・運営面の負担も考慮すれば3分割ないしは2分割が望ましい。その中で、学習への取り組み易さをより重視するのであれば、再受験のための学習時に注力すべき科目が特定されることから3分割がより適切ということができる。

■ 分割パターンの検討経緯

- 検討会では、2分割、3分割、4分割について検証を行った。
- ただし、4分割とした場合の時間割を検討したところ、試験終了時間が現行に比べ著しく遅くなることから、介護の業務に従事しながら勤務シフトを調整して受験に臨む者にとっては負担となり、受験者の利便性が低下することが懸念された。

1 検証方針 (4) 合格基準

■ 複雑すぎないものとする

- 国家試験であることを踏まえ、受験者に分かり易い仕組みであることが求められる。
- 万が一にも合否判定に誤りがあってはならず、運営の視点からも複雑すぎないものとすべきである。

■ 全科目に対する合格基準を見直す必要はない

- 受験しやすい仕組みの導入は、介護福祉士の知識及び技能の水準を低下させることを企図したものではないことから、全科目に対する合格基準を見直す必要はなく、現行と同様、問題の総得点の6割程度を基準として問題の難易度で補正した点数以上かつ試験科目群すべてにおいて得点があることを合格基準とすべき。
- その上で、パートごとに合格基準を設け、パートごとの合否を判断することが適当である。

■ パートごとの合格基準、再受験時の合格判定は下記のようにすることが望ましい

- パート間の難易度差があること、また運営面の負担も考慮し、全体の合格基準点に対し全科目を受験した受験者の平均得点の比率で按分することにより、合格基準を設けることが適切である。
- 再受験時の合否判定については、パートごとに行うとともに、受験したパートが複数ある場合には、受験した全パートの総得点や前回合格したパートを除いた部分の総得点等でも行うことが望ましい。

1 検証方針 (4) 合格基準

■ 合格基準の検討経緯は以下のとおり。

- 検討会での議論から、初回受験時は全員が全科目受験することとし、現行通りの基準(問題の総得点の60%程度を基準として、問題の難易度で補正した点数以上、かつ0点科目がないこと)で合格判定を行う。
- その上で全科目の判定では不合格の受験者について、パートごとの合格判定を行う。パートごとの合格基準は、a～cの方法を検討した上で、bの方法が望ましいと考えられた。
 - a. 全体の合格基準点を、各パートの問題数で按分する方法
→社会福祉士・精神保健福祉士試験と同様の考え方であるが、パートごとの難易度の差による補正がされない方法である。簡単なパートではパート合格の基準が低くなり、難しいパートではパート合格の基準が高くなる。
 - b. 全体の合格基準点を、各パートの平均得点で按分する方法
→受験者の平均得点を用いて按分することでパートごとの難易度の違いを反映して基準点を補正している。パートごとの合格基準点の合計は、全科目の合格基準点と一致するため、わかりやすさも担保されている。
 - c. 各パートごとに独立した合格基準を設定する方法
→パートごとの合格基準点の合計が、全科目の合格基準点と一致せず、受験生にとってわかりにくい。
- パート合格者が翌年以降に再受験する際は、1～3のいずれかの条件を満たすことで合格することができる。
 1. 全科目を再度受験し、現行通りの基準(問題の総得点の60%程度を基準として、問題の難易度で補正した点数以上、かつ0点科目がないこと)を満たしている。
 2. 前回不合格だったパートについて、パート合格の基準を満たしている。
 3. 受験した全パートの総得点や前回合格したパートを除いた部分の総得点が、パート合格の基準点を満たしている。
- 検討経過では、前年の得点を持ち越して合格判定を行う方法も検討したが、不採用となった。
 - 過去の得点を持ち越す場合には「受験者の過去の得点の補正」の措置を新たに加える必要があり、受験生にとって、また運営上もわかりづらい仕組みとなる。
 - また、社会福祉士・精神保健福祉士試験での科目免除においても、過去の試験の得点は勘案していない。

1 検証方針 (5)運営面への配慮

■ 導入にあたっては公益財団法人社会福祉振興・試験センターと十分な調整を行う

- パート合格の導入により、試験当日の運営業務の見直しも必要となるが、国家試験当日の受験者に著しい混乱が生ずることは避ける必要がある。
- 導入にあたっては、公益財団法人社会福祉振興・試験センター(以下「試験センター」という。)と十分な調整を行うことが不可欠である。
- パートを分割するほど、会場費や人件費等の運営コストが嵩む。そのため、例えば3分割の場合、午後に2つのパートを同一時刻に開始するなどの工夫を検討する必要がある。

■ パート合格の有効期間や受験料についての検討が必要

- パート合格の有効期間については、既に部分合格を導入している保育士試験を参考に、現時点では「3年程度」で考えるのがよいのではないかと思われるが、詳細を検討してから決める必要がある。
- 2回目以降の受験で、一部パートのみ受験する場合の受験料については、1回目の受験、2回目以降でも全科目受験する場合の受験料と同じでよいか、異なるようにする場合はいくらがふさわしいか等について検討する必要がある。

2 検証内容

- 本業務では、1の検討方針を踏まえ、第35回介護福祉士国家試験(R4年度、以下「第35回試験」という。)の受験者データを用いて、受験者属性別(※)や科目群別に平均正答率などの状況を分析し、試験科目をパート分割した場合の合否シミュレーションを行った。

(※)受験者属性

国籍 : 日本人、外国人(EPA、留学生、その他)

資格取得ルート : 養成施設ルート、実務経験ルート、福祉系高校ルート、経済連携協定(EPA)ルート

- 具体的には、以下の観点から分析を行った。
 1. 11科目群ごとの難易度(平均正答率、0点回答の割合)を受験者属性別に比較
 2. 試験科目をパート分けした場合について、パートごとの得点状況(平均正答率、得点分布)を受験者属性別に比較

3 検証結果 (1)受験者の属性

- 第35回試験(R4年度)の受験者79,151名の基本属性を整理すると以下のとおり。

■ 国籍別

- 日本人が全体の9割強を占め、得点の平均値・中央値は90点を超えている。
- 約8%を占める外国人の平均値・中央値は75点前後。得点の平均値・中央値が最も高いEPAと最も低い留学生の間には9点のひらきがある。

区分	N	割合	得点の基本統計量				
			最小値	平均値	中央値	最大値	標準偏差
日本人	72,683	91.8%	10	90.3	92	123	173.1
外国人	6,468	8.2%	12	73.9	76	118	388.7
うちEPA	1,153	1.5%	28	79.8	81	118	263.5
うち留学生	3,076	3.9%	12	70.8	72	116	427.2
その他	2,239	2.8%	12	75.2	78	118	367.4
合計	79,151	100.0%					

■ 資格取得ルート※別 ※:以下、ルート

- 実務経験ルートが約85%と大半を占め、以下、養成施設、福祉系高校、EPAの順。
- 得点の平均値・中央値が最も高いのは、全体の約3%を占める福祉系高校で95～97点。

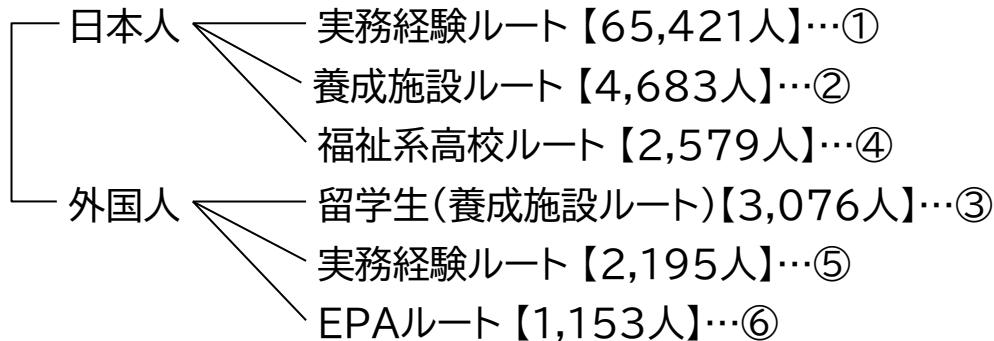
区分	N	割合	得点の基本統計量				
			最小値	平均値	中央値	最大値	標準偏差
養成施設	7,784	9.8%	12	87.1	93	123	431.6
実務経験	67,616	85.4%	10	89.1	91	122	183.9
福祉系高校	2,598	3.3%	28	94.5	97	119	145.8
EPA	1,153	1.5%	28	79.8	81	118	263.5
合計	79,151	100.0%					

3 検証結果 (1)受験者の属性

- ルートの内訳を国籍別にみると、実務経験ルートの日本人が82.7%と圧倒的に多く、以下、養成施設ルートの日本人(5.9%)、留学生[養成施設ルート](3.9%)、福祉系高校ルートの日本人(3.3%)、実務経験ルートの外国人(2.8%)、EPA(1.5%)の順。

	全体	養成施設	実務経験	福祉系 高校	EPA
全体	79,151	7,784	67,616	2,598	1,153
	100.0%	9.8%	85.4%	3.3%	1.5%
日本人	72,683	② 4,683	① 65,421	④ 2,579	
	91.8%	5.9%	82.7%	3.3%	
外国人	6,468	3,101	2,195	19	1,153
	8.2%	3.9%	2.8%	0.0%	1.5%
うちEPA	1,153				⑥ 1,153
	1.5%				1.5%
うち留学生	3,076	③ 3,076			
	3.9%	3.9%			
その他外国人	2,239	25	⑤ 2,195	19	
	2.8%	0.0%	2.8%	0.0%	

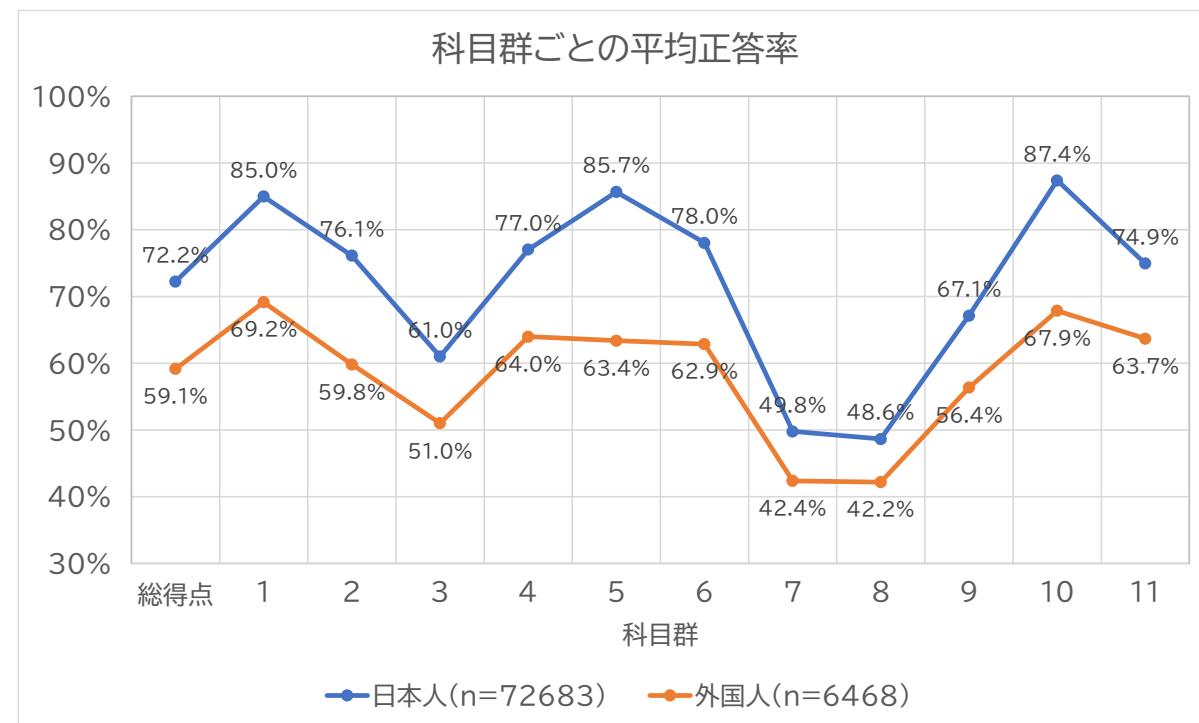
- 主な受験者層は以下の6グループに分けられる(丸数字は受験者数が多い順)。



3 検証結果 (2)科目群別の難易度 ①平均正答率

国籍別

- 日本人の平均正答率をみると、総得点ベースでは72.2%と標準的な合格基準である60%を大きく上回っている。
- 科目群別にみると、科目群1「人間の尊厳と自立、介護の基本」、科目群5「介護過程」、科目群10「医療的ケア」の平均正答率が高く、いずれも85%以上となっている。
- 一方、「こころとからだのしくみ」領域に属する科目群7「発達と老化の理解」と科目群8「認知症の理解」では平均正答率が50%を切っている。
- 外国人については、総得点ベースの平均正答率が59.1%と60%をやや下回っている。
- 特に、日本人と同様、科目群7「発達と老化の理解」と科目群8「認知症の理解」の平均回答率が他の科目群に比べて低く40%強にとどまる。

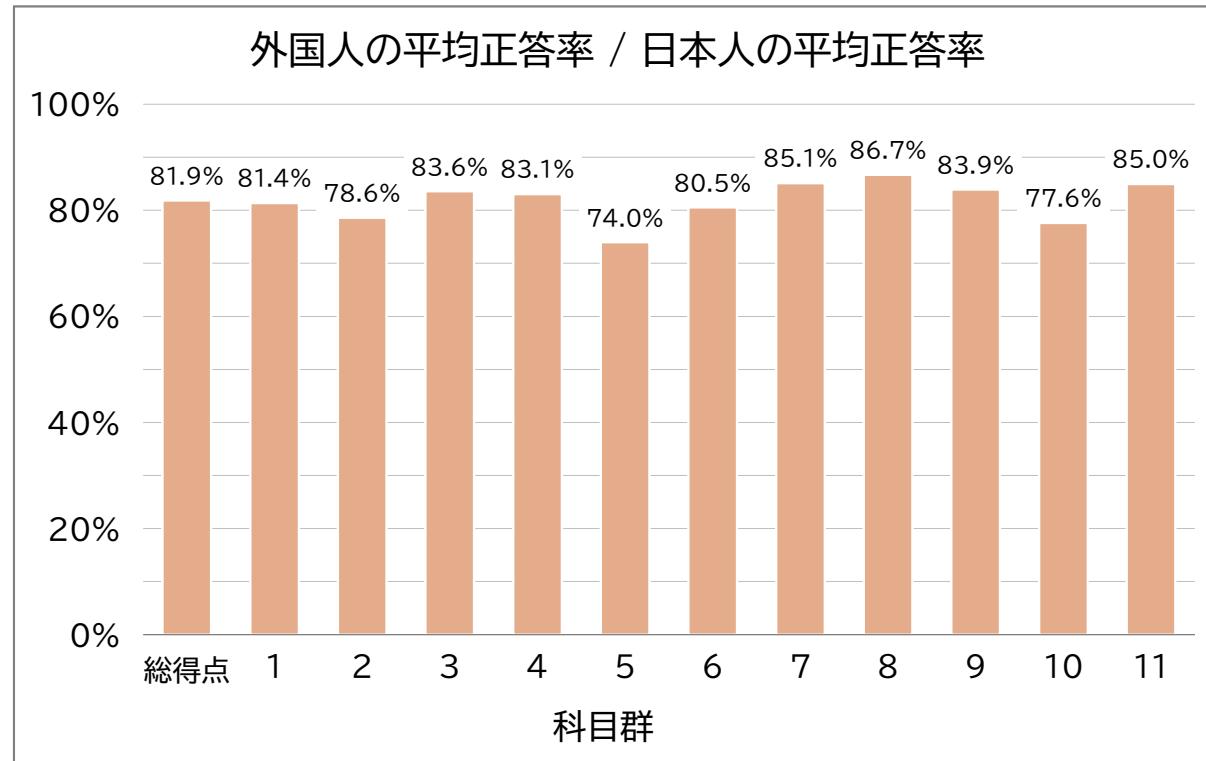


注:科目群番号と試験科目の対応関係についてはp4参照

3 検証結果 (2)科目群別の難易度 ①平均正答率

国籍別

- また、日本人と外国人を比較すると、日本人の平均正答率に対する外国人の割合は概ね8割前後の水準となっている。
- 但し、日本人の平均正答率が高い科目群5「介護過程」、科目群10「医療的ケア」においては上記の割合がやや低く、日本人と外国人との差が若干開いている。

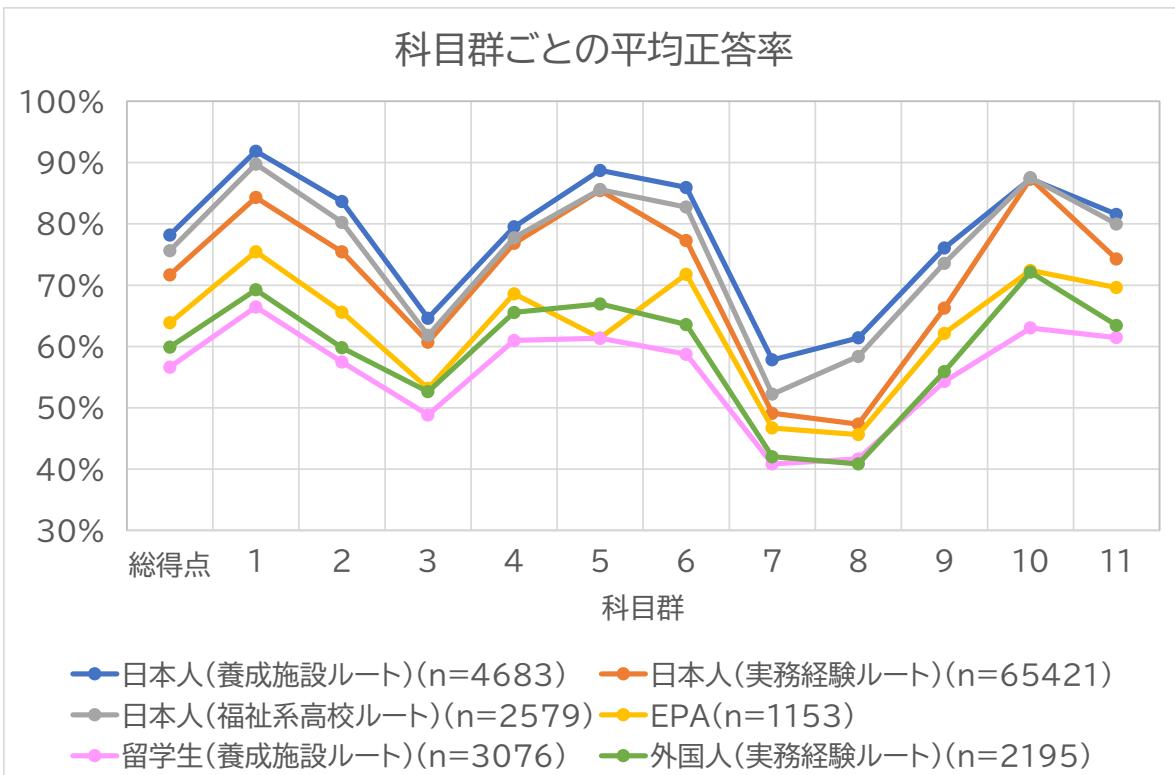


注:科目群番号と試験科目の対応関係についてはp4参照

3 検証結果 (2)科目群別の難易度 ①平均正答率

国籍×ルート別

- 国籍とルートをもとに6つのカテゴリに分けて比較すると、平均正答率は、概ね日本人(養成施設ルート)>日本人(福祉系高校ルート)>日本人(実務経験ルート)>EPA>外国人(実務経験ルート)>留学生(養成施設ルート)の順。
- 科目群別にみると、科目群5「介護過程」においては、外国人(実務経験ルート)とEPAの順序が逆転している。
 - EPAは外国人の中で最も成績がよいが、科目群5「介護過程」は苦手な傾向。



(バックデータ)

科目群	日本人			外国人		
	養成施設	実務経験	福祉系高校	EPA	留学生(養成施設)	実務経験
総得点	78.2%	71.7%	75.6%	63.9%	56.6%	59.9%
1	91.8%	84.3%	89.7%	75.4%	66.5%	69.3%
2	83.6%	75.4%	80.3%	65.6%	57.5%	59.8%
3	64.6%	60.7%	61.8%	53.2%	48.9%	52.6%
4	79.5%	76.8%	77.7%	68.6%	61.0%	65.5%
5	88.7%	85.5%	85.6%	61.4%	61.3%	67.0%
6	85.9%	77.3%	82.7%	71.8%	58.8%	63.6%
7	57.8%	49.1%	52.2%	46.7%	40.8%	42.0%
8	61.4%	47.3%	58.4%	45.6%	41.7%	40.8%
9	76.1%	66.2%	73.6%	62.1%	54.3%	55.9%
10	87.3%	87.4%	87.5%	72.4%	63.0%	72.1%
11	81.6%	74.3%	80.0%	69.6%	61.5%	63.5%

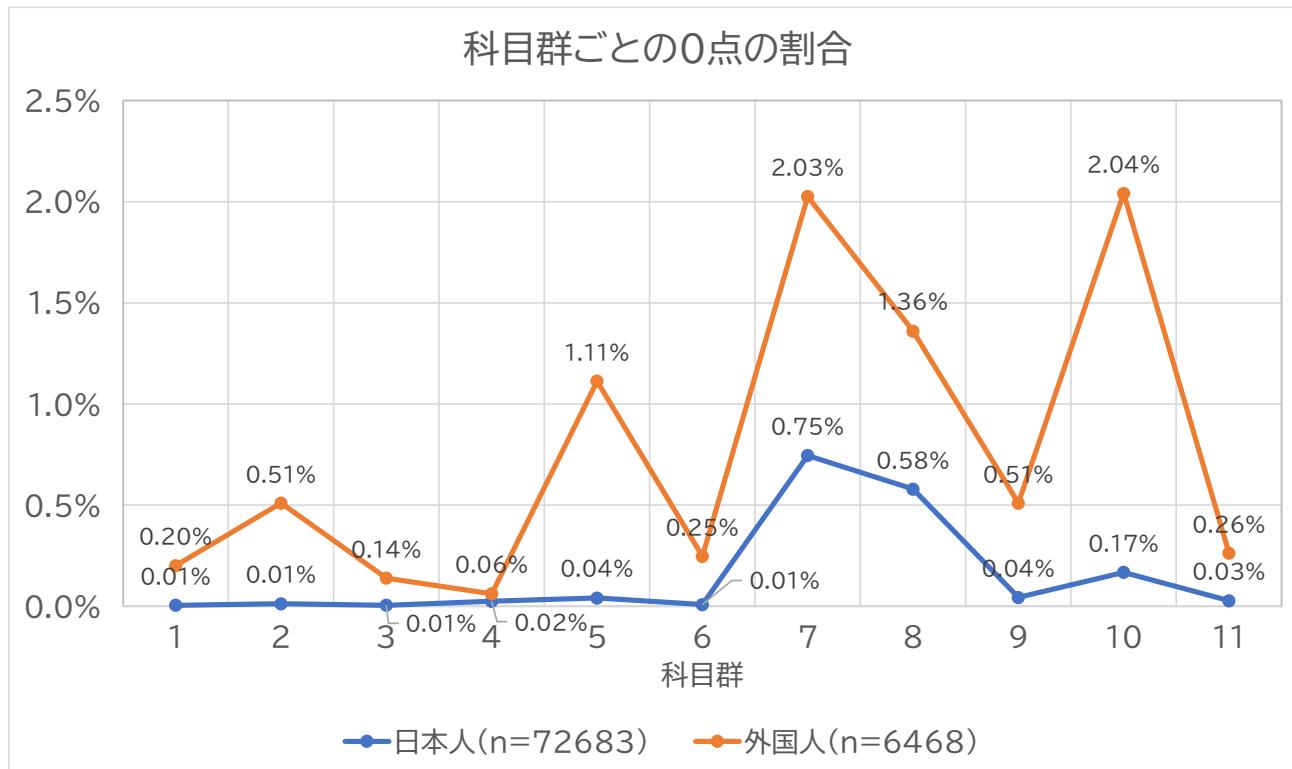
注1:科目群番号と試験科目の対応関係についてはp4参照

注2:外国人については、上記3区分の他に44名が存在(p14参照)するが、グラフ・表においては非掲載(以下、同様)

3 検証結果 (2)科目群別の難易度 ②0点回答の割合

国籍別

- 日本人における0点回答の割合を科目群別にみると、科目群7「発達と老化の理解」が0.75%と最も高く、科目群8「認知症の理解」(0.58%)がこれに次ぐ。いずれも「こころとからだのしくみ」領域に属する点が共通している。
- 外国人については全ての科目群において日本人を上回っている。0点回答の割合が特に高いのは科目群7「発達と老化の理解」と科目群10「医療的ケア」で、それぞれ約2%を占めている。



注:科目群番号と試験科目の対応関係についてはp4参照

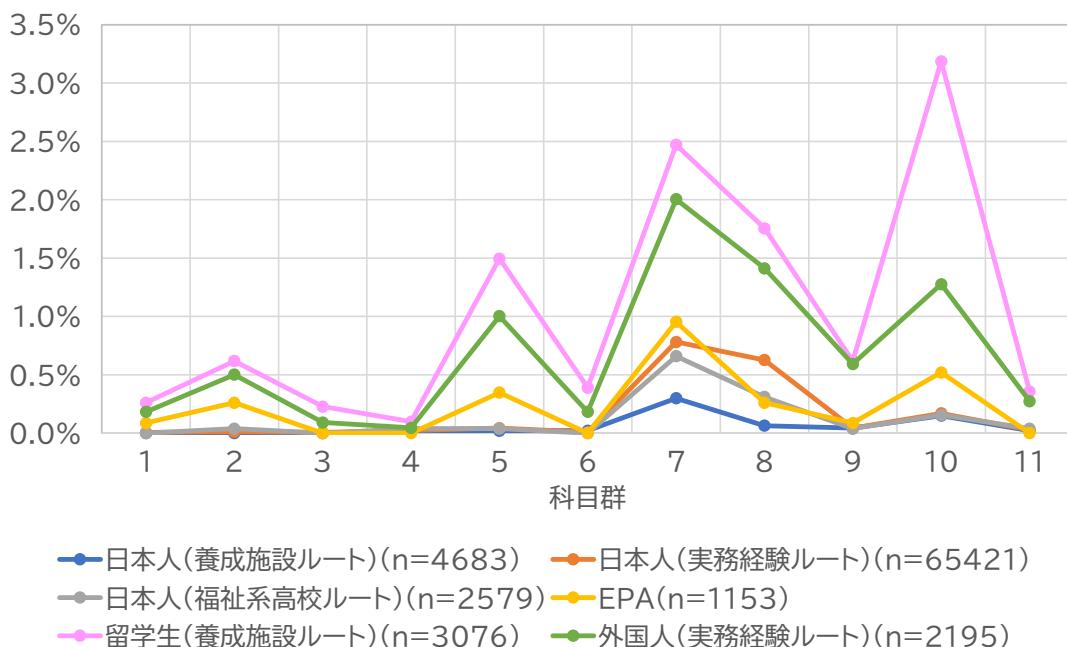
3 検証結果 (2)科目群別の難易度 ②0点回答の割合

国籍×ルート別

■ 国籍×ルート別にみると、留学生(養成施設ルート)と外国人(実務経験ルート)は0点回答の割合が高い。

- 科目群10「医療的ケア」、科目群7「発達と老化の理解」、科目群8「認知症の理解」、科目群5「介護過程」では割合が1%以上。
- 特に、留学生(養成施設ルート)の科目群10「医療的ケア」は3%超と突出。

科目群ごとの0点の割合



(バックデータ)

科目群	日本人			外国人		
	養成施設	実務経験	福祉系高校	EPA	留学生(養成施設)	実務経験
1	0.00%	0.01%	0.00%	0.09%	0.26%	0.18%
2	0.00%	0.01%	0.04%	0.26%	0.62%	0.50%
3	0.00%	0.01%	0.00%	0.00%	0.23%	0.09%
4	0.02%	0.02%	0.04%	0.00%	0.10%	0.05%
5	0.02%	0.04%	0.04%	0.35%	1.50%	1.00%
6	0.02%	0.01%	0.00%	0.00%	0.39%	0.18%
7	0.30%	0.78%	0.66%	0.95%	2.47%	2.00%
8	0.06%	0.63%	0.31%	0.26%	1.76%	1.41%
9	0.04%	0.04%	0.04%	0.09%	0.62%	0.59%
10	0.15%	0.17%	0.16%	0.52%	3.19%	1.28%
11	0.02%	0.03%	0.04%	0.00%	0.36%	0.27%

注:科目群番号と試験科目の対応関係についてはp4参照

3. 検証結果 (3)試験科目をパート分けした場合の時間割

- 試験科目を2~4つのパートに分割し、2分割、4分割、3分割を想定した。

(2分割)

- ◆ 現行の午前、午後での試験実施を維持しつつ、基本的知識を問う科目を1時間目、技術や総合的な知識を問う問題を2時間目に配置。

パート	科目群	科目名	領域	出題数	
午前	1	人間の尊厳と自立	人間と社会	2	
	1	介護の基本	介護	10	12
	3	社会の理解	人間と社会	12	
	6	こころとからだのしくみ	こころとからだのしくみ	12	
	7	発達と老化の理解	こころとからだのしくみ	8	
	8	認知症の理解	こころとからだのしくみ	10	
	9	障害の理解	こころとからだのしくみ	10	
午後	10	医療的ケア	医療的ケア	5	
	2	人間関係とコミュニケーション	人間と社会	4	10
		コミュニケーション技術	介護	6	
	4	生活支援技術	介護	26	56
	5	介護過程	介護	8	
	11	総合問題	総合問題	12	
		計:		125	

(4分割)

- ◆ 運営面を踏まえ1日間で実施しつつ、より受験生に資すると考えられる4分割で実施。
- ◆ 介護福祉士養成カリキュラムの領域を基本としつつ、学習内容の重なりで分割。4時間目は、総合的な知識を問う問題。

パート	科目群	科目名	領域	出題数	
1時間目	1	人間の尊厳と自立	人間と社会	2	12
	1	介護の基本	介護	10	
	3	社会の理解	人間と社会	12	
	9	障害の理解	こころとからだのしくみ	10	
2時間目	6	こころとからだのしくみ	こころとからだのしくみ	12	
	7	発達と老化の理解	こころとからだのしくみ	8	
	8	認知症の理解	こころとからだのしくみ	10	
	10	医療的ケア	医療的ケア	5	
3時間目	2	人間関係とコミュニケーション	人間と社会	4	34
		コミュニケーション技術	介護	6	
	4	生活支援技術	介護	26	35
4時間目	5	介護過程	介護	8	10
	11	総合問題	総合問題	12	36
計:					20

3. 検証結果 (3)試験科目をパート分けした場合の時間割

(3分割)

- ◆ 1日間で実施しつつ、より運営面に配慮した3分割で実施。
- ◆ 基本的知識を問うものを1時間目、技術や総合的な知識を問うものを2時間目と3時間目に配置。

パート	科目群	科目名	領域	出題数
1時間目	1	人間の尊厳と自立	人間と社会	2
		介護の基本	介護	10
	2	人間関係とコミュニケーション	人間と社会	4
		コミュニケーション技術	介護	6
2時間目	3	社会の理解	人間と社会	12
	4	生活支援技術	介護	26
	6	こころとからだのしくみ	こころとからだのしくみ	12
	7	発達と老化の理解	こころとからだのしくみ	8
3時間目	8	認知症の理解	こころとからだのしくみ	10
	9	障害の理解	こころとからだのしくみ	10
	10	医療的ケア	医療的ケア	5
	5	介護過程	介護	8
計:				125

3. 検証結果 (4)試験科目をパート分けした場合の得点状況

国籍別

■ 平均正答率

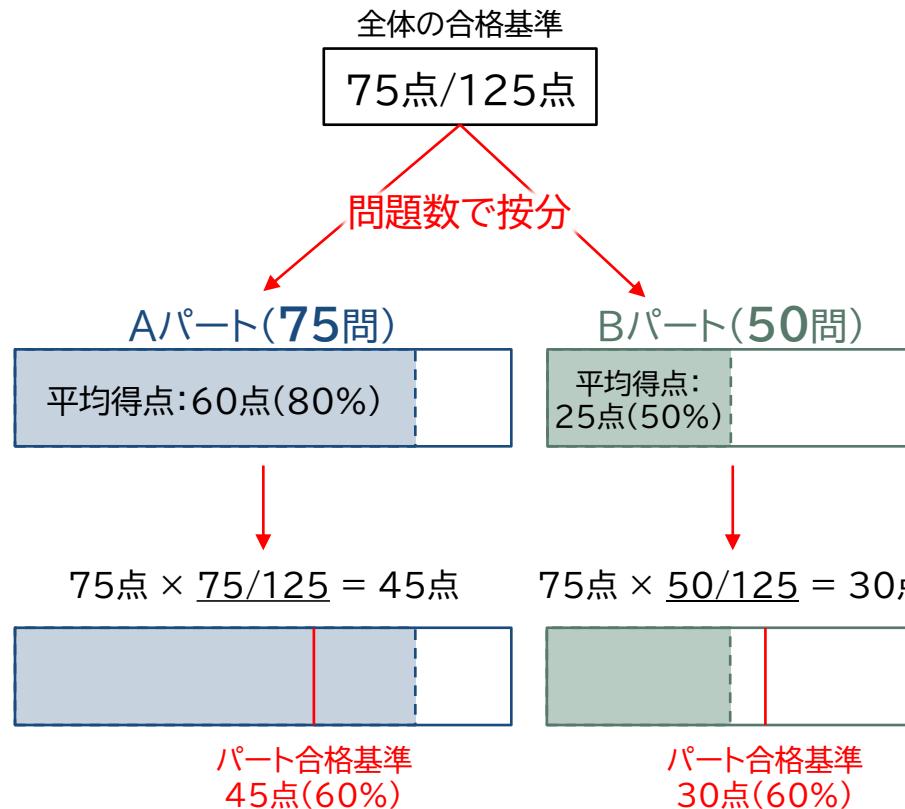
- 平均正答率が低いパートに含まれる科目群をグレーで表示すると、科目群6~10、即ち、「こころとからだのしくみ」領域と「医療的ケア」を組み合わせたパートの平均正答率が低く、難易度が高いことがうかがえる。

科目群	科目名	領域	出題数	2分割		4分割				3分割		
				午前	午後	1限	2限	3限	4限	1限	2限	3限
1	人間の尊厳と自立	人間と社会	2	○		○				○		
	介護の基本	介護	10	○		○				○		
2	人間関係とコミュニケーション	人間と社会	4		○			○		○		
	コミュニケーション技術	介護	6		○			○		○		
3	社会の理解	人間と社会	12	○		○				○		
4	生活支援技術	介護	26		○			○		○		
5	介護過程	介護	8		○				○			○
6	こころとからだのしくみ	こころとからだのしくみ	12	○			○			○		
7	発達と老化の理解	こころとからだのしくみ	8	○			○			○		
8	認知症の理解	こころとからだのしくみ	10	○			○			○		
9	障害の理解	こころとからだのしくみ	10	○			○			○		
10	医療的ケア	医療的ケア	5	○				○		○		
11	総合問題	総合問題	12		○				○			○

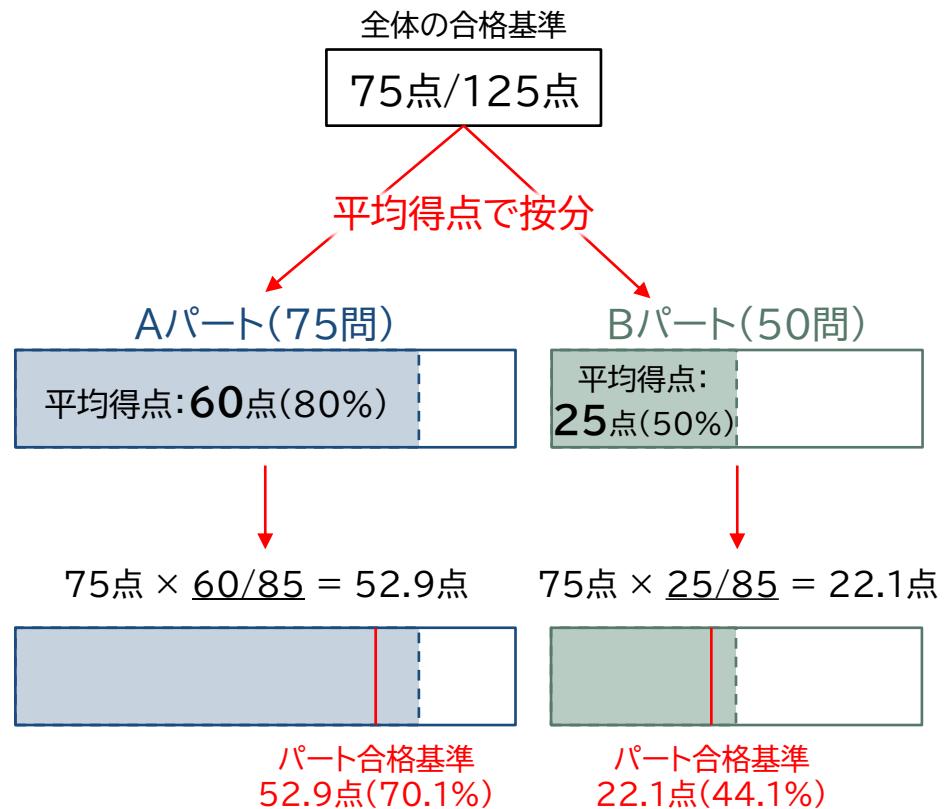
3. 検証結果 (5) パート分けした場合の合否シミュレーション 全体の合格基準点の各パートへの按分方法

- 問題数が125問、全体の合格基準が75点(6割)の場合の例

合格基準案a: 各パートの問題数で按分



合格基準案b: 各パートの平均得点で按分



(※)どちらの案を用いる場合でも、パート内に0点科目が1つ以上ある場合は不合格とする。